

蜀山人の残した元禄期江戸歌舞伎資料

—— 成篁堂文庫蔵「財源福湊（人間至楽）」から

赤間 亮 (立命館大学文学部 教授)

E-mail rat03102@lt.ritsumei.ac.jp

要旨

成篁堂文庫所蔵『財源福湊（人間至楽）』には、元禄期江戸歌舞伎の興行出版物14片の断簡が貼り込まれていた。これらは、考証の結果、元禄12年（1699）から元禄15年（1702）の間の上演にかかる役割番付、絵入狂言本であることが判明した。紋付と役割付をまとめると、役割番付は5点の新出資料であり、絵入狂言本の挿絵一葉も新出となる。資料の稀少な元禄期において極めて重要な資料群であり、元禄期江戸歌舞伎の興行出版物の状況を明らかにできた。

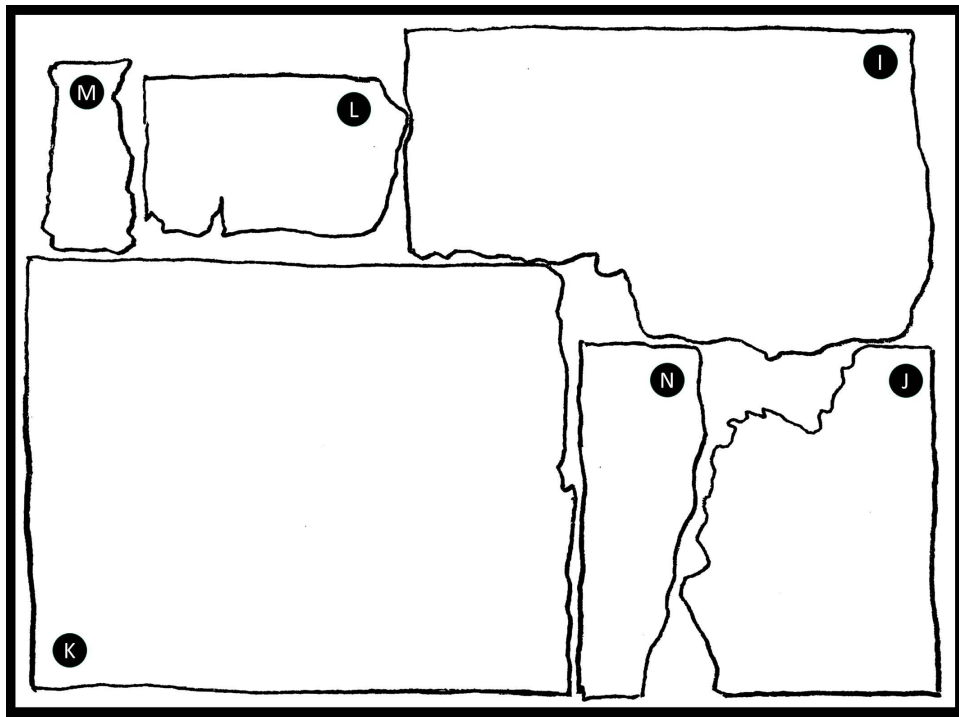
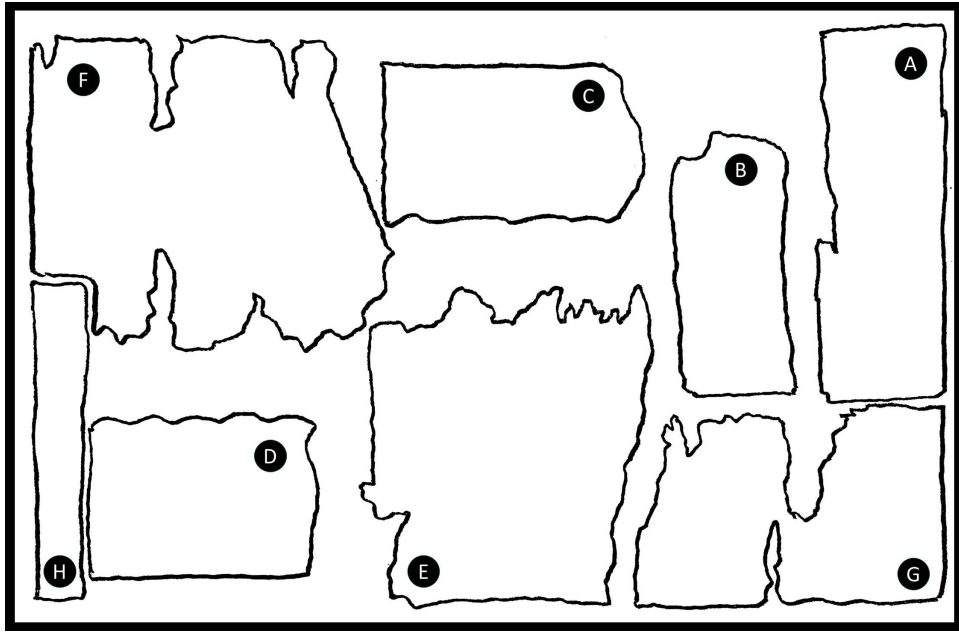
abstract

A scrapbook called *Zaigen fukusō (Ningen shiraku)* in the Seikido Bunko Collection includes fourteen pieces of prints to publicize *kabuki* performances in Edo during the Genroku era (1688–1704). My examination reveals that these pieces are from playbills (*Yakuwari-Banduke*) with the information of actors and their roles and story books with illustrations (*Eiri Kyogenbon*), all of which were published between 1699 and 1702. Moreover, they include new findings of five groups of playbills as well as one piece of illustration for a story book. This paper demonstrates that they are extremely valuable research materials which could shed light on the circumstances of theatrical publications in Edo during the Genroku era.

1. 「財源福湊（人間至楽）」

一般財団法人石川武美記念図書館の成篁堂文庫は、明治のジャーナリストとして著名な徳富蘇峰の旧蔵書で、主婦の友社の創業者石川武美が昭和15年に購入したものである。その主要な部分は、川瀬一馬によって編まれ、平成4年（1992）に刊行された『新修成篁堂文庫善本書目』によって知ることができる。元禄期江戸歌舞伎の資料としては、絵入狂言本2点が収蔵されており、歌舞伎研究者の間では夙に知られていた。蔵書には、太田南畝の旧蔵になる大部の貼込帖『財源福湊（人間至楽）』二巻一帖があり、これも『善本書目』に挙げられている。解題によれば、

文化八年太田南畝（蜀山人）自筆序。南畝が拓本・錦絵等を輯め、横大型の帳込帖に仕立て、表側には「人間至楽」、裏側には「財源福湊」と手題し、表には、辛未七夕蜀山人醉書、裏には「辛未文月のはしめ蜀山人」と序する。『人間至楽』には谷文晁・山本北山・市河寛斎・橘千蔭・唐衣橘洲（小嶋源之助）・石川雅望・享保高尾等の筆跡、及び元禄頃の山村座立役者紋盡・同狂言絵本断片・谷風の手形（以下略）



とあり、大変興味深い貼込帖である。本帖からは、蜀山人の序3面と、谷風の手形、そして解題に言うところの「元禄頃の山村座立役者紋盡・同狂言絵本断片」の2面が図版で掲載されており(837頁第1219図、838頁第1221図)、役割番付(紋番付)と、江戸板絵入狂言本の断簡が貼り込まれていることがわかる。

ところが、本目録の刊行からほぼ30年にもなろう

としているのに、この資料に関して歌舞伎研究の世界では一度も触れられたことがなかったようである。今回、成實堂文庫に紹介の可否を問い合わせたところ、快諾をいただいたので、この断簡群がそれぞれ何なのかを考証し、考察を加えてみる。

第1219図には、全部で8片、第1222図には、6片の断簡が、ここに転載図のようにランダムに貼り込まれている。1221図の資料Kを除いて、いずれも

引きちぎられたような断片であり、それをできるだけ余白がないように上手に配置し、それぞれの断簡には、三日月形の「青山堂」印が捺してある¹⁾。

以下、各葉の内容について考証していく。

2. 各葉の内容考証

A 役割番付 元禄14年(1699)10月 山村座 「大盃門出朝比奈」 第3丁目末尾部分

この断簡は、上下2段の配役表になっており、様式からみて役割番付の一部である。役者の姓は、省略されているので、それを補って翻刻する。

一	かねこ小太郎	(生島) 初太郎
一	いのまた	(滝井) 松五郎
一	あさりと市	(四野宮) 小八
一	ふるこほり	(藤本) なには
一	くまがへ	中(川) 半三郎
一	ひらやま	(桑原) 長五右衛門
一	はたけ山しけやす	(四野宮) 平八
一	ゑじまひめ	(早川) はつせ
一	ちさとのまへ	(松島) ていか
		(以上、上段)
一	〔渡し〕もり	(秋田) 彦四郎
一	おじまひめ	(津川) 半太夫
一	女ぼうせやま	(玉川) 小もんど
一	同 やゑざり	() みよし
一	あさいなの三郎	(中村) 伝九郎
一	あべのやすみつ	(中村) 清九郎
一	はながくおんりやう	(四野宮) 源八
	山村長太夫座	
	千秋万歳楽	
		(以上、下段)

従来知られていた資料から判明する役者の所属情報²⁾を使い、本番付上の役者が山村座に出勤している年度を整理したのが表Aである。これを見ると「みよし」を除いて、元禄14年(1701)年度の山村座に所属している役者たちであるため、この

演目の上演年は決定できる。

この時期、江戸で「みよし」を名乗る役者は、水木みよしと勝山みよしの可能性が考えられる。水木みよしは、元禄13年(1700)度の市村座に出勤していることが、元禄13年刊の評判記『役者三所世帯』『役者万年暦』『役者談合膝衝』から判明する。一方、勝山みよしは、元禄15年・16年度の山村座での出勤が、元禄14年11月の顔見世番付、元禄15年刊の評判記『役者二挺三味線』、元禄16年刊の評判記『役者御前歌舞伎』から確認できるが、現状で、元禄14年度の江戸での出勤は、確認できない。山村座での出勤状況からみて、勝山みよしである可能性は高いと推定するが、その場合、元禄14年(1701)度は、年度途中で舞台に立ち始めた役者だったということになる。元禄14年度は、顔見世狂言から五月狂言まで、それぞれの絵入狂言本が残っており、そこに「みよし」の名は見えないことから、おそらくは盆狂言(7月)以降の興行から出勤したのだろう。このように推定すると、他の役者の所属も含めて、矛盾は生じない。

彦四郎の「〔渡し〕もり」は、右側が欠けており、「渡」の一文字が難読であるが、元禄14年山村座で彦四郎を名乗る役者は、秋田彦四郎と確定でき、役柄は道外のため、道外役に相応しい役として「渡し守」を考えたが、確定できない。

次に、演目名と上演月であるが、この年度の山村座は、上述のように元禄13年11月「頼政万年暦」、元禄14年正月「傾城三鱗形」、3月「愛護十二段」、5月「大職冠二度珠取」と5月までの演目が狂言本により判明している。6月以降は、『歌舞伎年表』によれば、一演目も判明していないが、土田衛の「『歌舞伎年表』補訂考証³⁾」には、元禄15年刊『役者二挺三味線』江戸巻、中村伝九郎条に従って、『歌舞伎年表』で市村座の演目としてあげてある「大盃門出朝比奈」が、山村座の10月狂言であり、「中村伝九郎が市村座に転じ、染川十郎兵衛が、大坂松本座に転ずるに際しての門出狂言である。」と指摘している。すなわち、その中村伝九郎の配役が「朝比奈三郎」である、まさにこの興行の役割番付であることが判明する。

B・M 絵入狂言本 元禄13年(1700)7月 山村座
『艶冠女将門』 第七丁裏挿絵 上段部
分・下段

BとMは、同じ絵入狂言本の挿絵からの断簡である。Mは、裏向きに貼込まれており、これを反転させると、Bの左側に接続することがわかる。画中、Bには、「ほうず 孫太郎」(上段)、「ひてさと 七三郎」「いわねの介 半三郎」(下段)、Mには、「玉ぎりひめ 大吉」「水くるま 大からくり」とある。役者は、それぞれ、(南北)孫太郎、(中村)七三郎、(中川)半三郎、(生島)大吉であり、この顔ぶれが一致する座組の座と年度は、元禄13年山村座となるが、現存の絵入狂言本の挿絵を探すと、8月の『艶冠女将門』⁴⁾の第壱丁裏の挿絵と一致した。

なお、「山村座狂言絵本の一葉」との朱筆書込がある。

C・D 絵入狂言本 元禄12年(1699)8月 山村座
〔名古屋山三〕 第八丁表挿絵

C・Dも同一の狂言本の挿絵である。2葉は、雲形枠で区切られた上下2段の絵が、ちょうど雲形の形のまま裁断されて、切り離されて貼り込まれている。Cに「山村長太夫 名古屋山三 狂言絵本一葉」、Dに「山村長太夫 名古屋山三 狂言絵本一葉 西国兵五郎 道外の元祖」と、それぞれに朱書きが加えられており、わざわざ青山堂や南畝自身が分離して貼り込ませたとは思えない。

画中、Cには、「伴左衛門 伝九郎」「山三郎 新五郎」「かつらき 兵蔵」「さよの中山むけんのかね」、「なこや」(柱題)、Dには、「かもん 兵五郎」「たまきくひめ 大きち」「伴左衛門 伝九郎」とあり、役者はそれぞれ、(中村)伝九郎、(生島)新五郎、(松本)兵蔵、(西国)兵五郎、(生島)大吉、(中村)伝九郎と特定できるので、この顔ぶれは、元禄12年山村座の座組と一致し、現存の絵入狂言本の挿絵を探すと、8月に出版された『(名古屋山三)』⁵⁾第八丁表の挿絵であることが確認できた。

E 役割番付 元禄15年度(1701) 森田座
紋付(1枚目)

役割番付の冒頭に付く、その年度の所属役者の紋と名前を一覧にした“紋付”である。当時は、「紋尽」(もんづくし)と呼んでいた。現状最古の紋付は、元禄8年(1695)度の森田座のものが残っているが、この頃から2枚で一組だったようである。紋付は、年度内は、基本的に同じものを使っていたと考えられる⁶⁾。

本紋付は、板心に「木挽町三丁目 小兵衛板」とあることで、森田座の紋付であることがわかる。以下、文字部分を翻刻する。

(紋) 中村清五郎

(紋) 坂〔東〕 沢右衛門

木挽町三丁目 小兵衛新板

(紋) 小山三事 さるわか山左衛門

(紋) くら之介事 森田弥三五郎

(紋) 高村又四郎

(紋) 大鳥九郎次

(紋) 大谷広右衛門

(紋) 春川又八

(紋) 坂田銀四郎

(紋) 歌仙四郎五郎

(紋) 松本半左衛門

(紋) 中村弥平太

(紋) 安田吉郎次

(紋) きぬゑ十郎兵衛

(紋) 松本吉左衛門

(紋) 西国兵助

(紋) 〔三〕 国〔彦作〕

この時期の紋付は1枚目に「立役」、2枚目に「子ども」を配することが定着しているので、本紋付は、1枚目である。ここに掲げられる全役者の森田座への出勤状況を一覧にしたものが表Eである。これを見ると、元禄13年から16年の4年間のどの年度に

も該当する可能性があるが、元禄15年が比較的可能性が高いことがわかる程度である。ところが、本紋付には猿若山左衛門、森田弥三五郎の2名に改名情報が付されており、これを手掛りにすることができる。猿若山左衛門は、元禄15年3月『役者二挺三味線』に、「猿若今山左衛門」と見出しに掲出され、この年度に改名したことがわかるが、評文にも「扱御舎兄山左衛門相果られ、則名跡をつぎ給ひ」(3234)⁷⁾とある。森田弥三五郎は、「森田弥惣五郎」(『役者二挺三味線』目録)とも表記される役者で、この名では、元禄15年の森田座と宝永元年の森田座に出勤の記録がある。この時の評文には、「あれが玉村内蔵之助殿かと、諸見物見ちがへ侍る。御元服の顔見せから、大当りにて」(3236)とあり、この年度の顔見世興行で若女方から立役になり、改名したものである。すなわち、本紋付が、元禄15年度のものであることは明瞭となった。

従来の資料から作成した出勤記録と突き合わせでも明確な結果が出なかったのは、この年度、森田座の上演資料が役者評判記にしかなく、評判記には取り上げられづらい下位の役者の情報が不足していたからである。その意味で、本紋付の出現の意味は大きい。

F 役割番付 元禄14年度(1701) 森田座
紋付(2枚目)

この紋付は、若女方や若衆型などの「子ども」役者にあたるため、紋付2枚目である。以下、文字部分を翻刻する。

(紋) 歌村十次郎
(紋) 花岡みやこ

木挽町三丁目

(紋) 市川団蔵
(紋) 出来島喜世三郎
(紋) 玉村内蔵之助
(紋) 市川万太夫

(紋) 出来島大蔵

(紋) 高島虎之助
(紋) 花岡小〔倉〕
(紋) 出来島大助

板心に「木引町三丁目」とあり、欠落した下部の板元名は「正本屋小兵衛」とであると推定できるので、森田座の紋付である。「玉村内蔵之助」がおり、Eの森田弥三五郎の改名より前の年度であることも踏まえ、記載役者の森田座への出勤状況を表Fにしてみると、元禄13年と元禄14年が候補となる。元禄13年(1700)度の森田座は、元禄12年(1699)11月顔見世「当世小国歌舞伎」の役割番付の紋付2枚が残っており、本紋付とは異なる座組であるので、元禄14年度の紋付であると認定できる。

G 役割番付 元禄15年度(1701) 森田座
紋付(2枚目)

上部が欠落した、役割番付の紋付1葉。「子ども」役者が並んでいるので、2枚目である。掲載の役者を翻刻する。

(紋) 玉村久米之助
(紋) 花岡沢之助
(紋) 生島〔 〕
(紋) 歌村数馬
(紋) 山本小太夫
(紋) 出来島大助

(紋) 花岡染之丞
(紋) 中山小主水
(紋) 花岡小倉
(紋) 上村〔 〕
(紋) 中村妻之丞
(紋) 出来島若之助

2枚目「子ども」役者の末尾部分なので、まだ若年で舞台経歴の少ない役者が並んでいる。同様に、出勤状況を他の資料を参考にして表Gにまとめると、元禄10年(1697)から宝永3年(1706)までの間に、従来の記録では出勤記録が一度も認められない役者が3名いるほか、出勤機会が極めて限

定された役者が多い。本資料は板心がなく、E、Fとも様式が異なるので、他座の紋付の可能性もあるが、中村妻之丞1名を除いて、出勤記録は森田座に限定されている。そのため、森田座の紋付で、しかも中村妻之丞が中村座に出勤している年度以外ではないかと推定できる。なお、元禄15年度に「中村妻之助」が一度だけ『役者二挺三味線』に掲載されるが、「妻之丞」の誤植である可能性を考慮に入れる必要もある。一方で、元禄14年3月の狂言本『出世隅田川』の役人替名付にある「中むらつまの丞」が誤植である可能性も考えねばならない。そのため出勤表Gからは元禄14年度か元禄15年度かの判断はしかねる。

しかしながら、森田座は、元禄13年度の紋付2枚目（「当世小国歌舞妓」）、元禄14年度と推定できる紋付2枚目（資料F）があり、本紋付は、結局、元禄15年度に落着くことになる。すなわち、資料Eと組になる元禄15年度の紋付と推定したい。

H 役割番付 元禄14年(1700)11月9日 森田座
「太平国樞鑑」

役割番付の末尾の断簡。以下、翻刻する。

一 どうしゆく 三人
一 しだノ小太郎 できじまわか之丞
一 らう母 まつもと吉左衛門
(以上、上段)

一 田上一学 太夫 森田勘弥
一 玉作百性 座元 ばんどう又九郎
(以上、下段)

元禄十四辛巳ノ曆霜月吉祥日
狂言作者 林勝似 千秋万歳

太夫と座元がおり、森田座であること、ならびに刊記から元禄14年11月の顔見世興行であることは明瞭である。大名題は、「補訂考證」⁹⁾に従い、『江戸芝居年代記』に載る「太平国樞鑑」と推定する。あるいは、資料E・Gがこの役割付とセットになる紋付であったのかもしれない。なお、『補訂考證』に、『役者二挺三味線』江戸の巻から配役一覧を記述するが、本番付により、さらに配役が追加できた。

相違点は以下の通り。

出来島若之丞：しだノ小太郎→(ナシ)
松本吉左衛門：らう母→信田殿後室
森田勘弥：田上一学→田上野一学
坂東又九郎：玉作百性→万歳猿若

また、狂言作者の「林勝似」⁹⁾は、これまでまったく報告されたことのない作者である。なお、「元禄十四年木引丁三丁目森田勘弥座かをみせ役割番付の末の一葉」と朱筆書入れがある。

I 役割番付 元禄15年度(1702) 山村座
紋付(2枚目)

下部に欠損がある山村座の役割番付の紋付である。以下、図中の文字を翻刻する。

山村長太夫	惣子とも	紋つくし
(紋)京四条若女方		早川初瀬
(紋)大坂若女方		玉村衛門
(紋)江戸若女方		津川半太夫
(紋)京四条若女方		竹中喜世之助
(紋)江戸〔若衆〕方		四野宮平八
(紋)江戸若衆方		中川半三郎
(紋)京四条若女方		勝山三芳
(紋)大坂若女方		松島庭歌
(紋)京四条若女方		玉川小主水
(紋)江戸若衆方		浜崎磯五郎
(紋)江戸若衆方		袖岡小太郎
(紋)江戸若衆方		袖岡吉弥
(紋)京四条若女方		早川万太夫
(紋)京四条若〔女方〕		天津右近
(紋)京四〔条若女方〕		勝〔山みなど〕
(紋)		香川〔勝之丞〕
(紋)		藤〔田吉三郎〕
右惣子〔とも紋つくしのこらす〕		
あらた〔め令板行もの也〕		

(紋)
(紋)

(紋)

(紋)〔江戸若女方 滝井松五郎〕

(紋)〔江戸子やく 四野宮吉十郎〕

まず、掲載役者の山村座への所属状況は、表Iである。すなわち、元禄15年(1702)度の紋付であることは疑いの余地がない。その上で、元禄15年度に所属する役者から部分欠損の役者名を推定したのが〔 〕で補った役者である。3段目の紋のみが残る役者は、この年度の他の資料のなかからは一致する紋を見付けることはできないが、欠損のない資料Kが、次年度の紋番付と考証でき、同じ紋が同じ位置にあることから、当該紋付にも同一の役者が配置されていると推定した。

なお、「木挽丁三丁目山村長太夫座 顔見世番付」との書き入れがあるが、「顔見世」興行の番付の意味であろう。ただし、顔見世興行の時の紋付かどうかの検討が必要である。

J 元禄14年度(1701) 山村座 紋付(1枚目)

右側一部が残る山村座の役割番付の紋付である。以下、図中の文字を翻刻する。

山村座 立役者 紋尽
木挽町 ぬざうしや 三左衛門板

(紋) 江戸立髪丹前 中村七三郎
〔紋〕 江戸やつこ丹前 中村伝九郎
江戸〔 〕門

(紋) 江戸立役 小河善五郎
(紋) 江戸立役 中村五郎四郎
(紋) 江戸立役 早川伝五郎

(紋) 江戸立役 山川孫九郎
(紋) 江戸立役 市川勝平次
(紋) 江戸立役 山本〔加左衛〕門

同様に、掲載された役者の所属座の状況を整理し、表Jにまとめる。これにより、元禄14年度山村座の立役者(1枚目)の紋付であることは明白であ

る。また、下段三人目の「山本 門」は、元禄14年正月「傾城三鱗形」、5月「大職冠二度珠取」の絵入狂言本に出る山本加左衛門であると推定する。

K 元禄14年度(1701) 山村座 紋付(2枚目)

当該の紋付は、欠損のない紋付である。すなわち、表Kに示すように、元禄14年(1701)度山村座に所属する役者が掲出されており、資料Jと一組となる、2枚目の紋付である。以下、同様に図中の文字を翻刻する。

山村長太夫 惣子とも紋つくし
木挽町 ぬざうしや 三左衛門板

(紋) 京四条若女方 早川初瀬
(紋) 江戸若女方 生島大吉
(紋) 江戸若女方 津川半太夫
(紋) 京四条若女方 竹中喜世之助
(紋) 江戸若衆方 四野宮平八
(紋) 江戸若衆方 中川半三郎
(紋) 京四条若女方 松本久米之助
(紋) 大坂若女方 松島庭歌
(紋) 京四条若女方 玉川小主水

(紋) 江戸若衆方 浜崎磯五郎
(紋) 江戸若衆方 袖岡小太郎
(紋) 京四条若女方 早川妻之助
(紋) 江戸若衆方 生島初太郎
(紋) 京四条若衆方 天津右近
(紋) 京四条若衆方 野川宇源太
(紋) 京四条若女方 染山小和泉
(紋) 江戸若衆方 四野宮小八

右惣子とも紋つくしのこらす
あらため令板行もの也

(紋) 江戸若女方 浅田庄太夫
(紋) 大坂若女方 音羽衛門
(紋) 江戸子やく 四野宮小源次
(紋) 江戸若女方 滝井松五郎
(紋) 江戸子やく 四野宮吉十郎

(紋) 江戸子やく 藤本難波
 (紋) 江戸子やく 松を村之助
 (紋) 江戸子やく 玉垣作弥

挿絵の役名を翻刻すると、
 「むすめさくらき」 「くり原ゆきへ」
 「坂上元田丸」

L 役割番付 元禄13年(1700)11月 山村座
 「頼政万年暦」

役割付の断簡である。

一 はふくの源太	市川〔勝平次〕
一 曾我のかなめ	小川善五郎
一 大友の熊てる	桑原長五右衛門
一 平の時もり	早川伝五郎
一 糸みの兵藤	かまだ滝右衛門
一 岩屋のちや屋	吉田六郎次
一 まこものまへ	生島大吉
一 つぼね	中川兵三郎
一 こしもと白菊	玉川小主水
一 ときはのまへ	津川半太夫
一 つぼね	山本金十郎
一 浅田房之助	四の宮小八郎
一 高倉のみや	中川半三郎
一 藤わらの実かた	藤田所三郎
一 猪の早太	中村伝九郎

以上を既存資料から探すと、元禄13年11月山村座「頼政万年暦」の絵入狂言本¹⁰⁾の配役と一致する。狂言本の役人替名付とは、文字遣いが異なるが、本断簡の「はぶくの源太 市川〔勝平次〕」から「つぼね 山本金十郎」までと、「浅田房之丞 四の宮小八郎」から「猪の早太 中村伝九郎」までは、並び順も一致している。この二つの部分は、間で裂けており、左部の裂け目にはほんの少し墨が残っていて文字が印刷されていたと思われるので、狂言本の役人替名付の「こしもとやしほ 松本久米之助」から「桜井東之介 生島初太郎」に至る7名の配役が欠落していると推定される。本資料からは、残念ながら、文字遣いの異動以外には、上演に関わる新たな情報が加わることはなかった。

N 絵入狂言本 元禄13年(1702)11月 森田座
 『風流鈴鹿鳳武丸』挿絵

である。この役名で、既存資料を探すと、元禄14年3月『役者略請状』の歌村十次郎評(3090)に「顔見世に大江之助妹桜木に成三番めに出られて、道行の所作扇の手。次に長刀にてやりおどりのかく。」、坂東又九郎評(3070)には「顔見せ狂言坂ノ上の元田丸になられ、やつし事いつみてもいそいそしたお顔。面白がらぬ物なし。刑部桜木に宿かすとて、とほそに立より女房がひとりばなしを聞。あれへめうといさかいのこん立をしますと云れしはおかし。歌村に名をとられ、昔は坂ノ上の元田丸と申ましたが、今は坂東又九郎と申ますと云れしはあたらしい」とあり、この挿絵に描かれている場面の状況も併せて、演目が特定できる。

「くり原ゆきへ」は、紋から高島虎之助、また、三星の紋は、この年度の座組みから松本四郎三郎と推定できる。同じく『役者略請状』の松本四郎三郎評(3084)に「去顔みせ村上刑部」とあって、役名も判明した。したがって、この挿絵には、

村上刑部	松本四郎三郎
むすめさくらき	歌村十次郎
くり原ゆきへ	高島虎之助
坂上元田丸	坂東又九郎

という配役が描かれている。この『風流鈴鹿鳳武丸』については、やはり大田南畝の旧蔵にかかる貼込帖『寸志不遣』¹¹⁾に第八丁裏が残ることが知られていたのみであり、貴重である。

3. 考察

3.1 役割番付について

従来知られていた、元禄期の江戸の役割番付は、次の11点である¹²⁾。

元禄8年(1695)カ「和国ごすいでん」 森田座
紋付2枚・大名題小名題・役割付・仕組の次第
正本屋小兵衛

元禄8年(1695)11月「三浦朝比奈岩石割」 森
田座

紋付2枚・大名題小名題・役割付
正本屋小兵衛

元禄9年(1696)7月「平親王将門」 森田座
紋付2枚・大名題小名題・役割付
正本屋小兵衛

元禄9年(1696)11月「四天王姫鑑」 森田座
紋付2枚・大名題小名題・役割付
正本屋小兵衛

元禄12年(1699)11月「当世小国歌舞妓」森田座
紋付2枚・各番役割付2枚
正本屋小兵衛

元禄12年(1699)11月「平清盛美人揃妓」中村座
紋付1枚・大名題小名題・各番役割
中島屋 ※紋付は1枚欠カ

元禄14年度(1701) 中村座
紋付1枚

元禄14年(1701)6月以前「但馬屋清十郎卅三年
忌」 森田座
役割付1枚

元禄14年(1701)9月「三世道成寺後日」森田座
役割付1枚
正本屋小兵衛

元禄16年(1703)1月「源氏四本柱」 市村座
役割付1枚

元禄16年度(1703) 森田座
紋付1枚

今回出現した資料の内、役割付と紋付が同一年
度でセットにできるものを一つにまとめて一覧にする
と次の通りである。

F 元禄14年度(1701) 森田 紋付
正本屋小兵衛

JKL 元禄13年(1701)11月 山村 紋付・役割
付 絵草紙屋三左衛門

A 元禄14年(1701)10月 山村 役割付
絵草紙屋三左衛門

EGH 元禄14年(1702)11月 森田 紋付・役
割付 正本屋小兵衛

I 元禄15年度(1702) 山村 紋付
絵草紙屋三左衛門

すなわち、一気に5点の役割番付が追加された
のである。ちなみに、既知の役割番付の内、元禄
14年森田座の「但馬屋清十郎卅三年忌」と「三世
道成寺後日」は、南畝の貼込帖『寸紙不遣』の中
に貼込まれた零葉である。南畝の営みがなければ、
半数近くの役割番付は、失われたことになるし、山
村座は役割番付を出していたのかどうかも判断でき
なかったことになる。一方で、これまでも7点の役
割番付が知られていた森田座であるが、さらに2点
増えたことで、相変わらず半数以上が森田座のも
のである。サンプル数は少なく、それは偶然とする
のが妥当だろうが、あるいは正本屋小兵衛の活発
な活動が指摘できるのかもしれない。

なお、絵入狂言本の場合、江戸四座の現存最
古の伝存作品は、中村座が元禄10年1月、山村座
が元禄12年6月、森田座が元禄12年11月、市村
座が元禄16年7月となっている。これも偶然の可能
性があるが、市村座の興行方法(番毎の「追出し」)
とも絡んで、市村座の興行出版物は他と比べてス
タートが遅れたのではないかという推定の成り立つ
可能性がより強まった。

江戸の役割番付は、時代が下ると紋付1丁、大
名題のあと、小名題と各番の役割付を配置した2
丁、合せて3丁一セットとなり、中期ぐらまでは、
3丁を横に貼り付けていたようであるが、後期は、紙
縫での袋綴じ冊子となる。しかし、元禄期では、紋
付2丁、大名題小名題1丁、役割付1丁という構
成からスタートし、“仕組の次第”、“見どころ”など
の簡条書が付く場合もあった¹³⁾。大名題小名題が1
枚で出る型式は、絵入狂言本の初丁の表に大名題
小名題、裏に役人替名付が付く、上方にはない江
戸独特の型式に繋がっていると考えられる。

それでは、大名題小名題が独立した1丁では無
く、小名題の各番に役割付を並べるようになったの
はいつからなのか。現存の役割番付では、元禄12
年11月「当世小国歌舞妓」森田座からということに
なる。

しかし、実は元禄12年9月山村座の狂言本『五頭大伴魔取』は、役割付2丁と、本文は劇中で使われた浄瑠璃の詞章を収録した特殊な狂言本であり、この役割付部分が小名題を各番に分割した役割番付の存在を示す、最古の資料になる。

つまり、江戸の絵入狂言本の刊行が始まったと考えられる元禄10年(1697)に中村座が、役割番付を倣い、狂言本初丁の大名題小名題・役人替名方式を採用したが、3年目にはすでに役割番付の様式に変化が起き、少なくとも元禄12年中には、後代に継承される小名題分割方式が出来上っていたという推論が成り立っていたことになる。

それでは、今回取り上げた、A、H、Lは、この推論を覆すことになったのだろうか。

Aは、『五頭大伴魔取』の役割付末尾と完全に型式が一致し、ちょうど第五番の小名題枠の後の役割付部分が切り取られたものであることがわかる。

Hは、上演年月の枠が末尾に囲われた型式が、元禄14年9月「三世道成寺後日」と一致しており、これも矛盾がない。

Lについては、上述したように、2枚の断簡を一枚に繋がるように貼り込んである。

中村伝九郎は、他の役者より大き目に、かつ前の役者と間を空けて配置されているが、大立物ではよく見られる書式であり、左に匡郭があるから、ここで改段されて二段目に配役が続くか、下段部分の末尾と考えられる。

また、微妙であるが、右端にも匡郭が一部残っていることが確認できるので右部は、市川勝平太がこの枠の書出しである。狂言本『頼政万年暦』の役人替名付と突き合わせて、役割番付の方は、7名が欠落していることが予想できたが、この欠落した7名を仮に下段につなぎ合わせると、11名となり、右部の11名と人数が一致する。

元禄12年11月「当世小国歌舞伎」の役割付の第壺は上下各17人、第二は上下各12人、第三は上下各12人、第四は、上14人、下16人であるから、Lは、上下、数名が欠落している可能性も含めて、人数に矛盾がないため、おそらく「頼政万年暦」の第壺か第弐の役割付の上下を、組み合わせ、繋げて貼ったものであったのだろう。

このように今回出現した役割番付の役割付部分

は、いずれも小名題分割型の役割番付から破り取られたものであったと考えて矛盾がない。

したがって、江戸歌舞伎の役割番付の特徴となる“小名題分割方式”は、すでに元禄12年頃には、定着していたと言ってよいだろう。

3.2 絵入狂言本

絵入狂言本については、

BM 絵入狂言本 元禄13年(1700)7月 山村座
『艶冠女将門』 第七丁裏挿絵 上段一部分・
下段

CD 絵入狂言本 元禄12年(1699)8月 山村座
『〔名古屋山三〕』 第八丁表挿絵

N 元禄13年(1700)11月 森田 狂言本
『風流鈴鹿鳳武丸』挿絵

の3点の江戸板狂言本であった。その内、BM、CDは、既知の完本が存在し、資料的な新情報は見いだせなかった。

しかし、Nは、新タイトルでこそなかったが、新しく発見された挿絵である。五番続の内の三番目の挿絵であろうことも評判記の記述から確認できた。

江戸板狂言本は、現存するものとしては、現在、66点が知られ、そもそも数が限定されている。平成4年(1992)に演劇博物館で開催した「元禄歌舞伎展」¹⁴⁾は、絵入狂言本を網羅的に調査の上、開催された展覧会であったが、この時以降に、新たに追加された江戸板狂言本は、本作品以前には、わずかに2点である。従って、今回、断片ではあっても新たな挿絵部分が出現し、しかも、そこが役者評判記に触れている場面であったことは、それなりに価値がある。なぜならば、そもそも役者評判記は、顔見世狂言と二の替狂言(初春狂言)を対象として記述されるもので、それ以外の月の演目に触れることは稀だからであり、評判記の記述と狂言本の挿絵を比較できる事例はそれほど多くないからである。

絵入狂言本の挿絵を考える上で、材料が一つ追加されたことを喜ぶたい。

220年も以前に、こうした片々たる断片であっても、貼込帖にして残してくれた大田南畝には、改めて感

謝したい。また、歌舞伎史の専門家ではないにも関わらず、本資料の重要性を見抜き、目録の図版に掲載してくださった川瀬一馬氏の慧眼に敬意を表する。

〔謝辞〕

石川武美記念図書館には、コロナ禍で図書館が閉鎖されているなか、本資料の紹介、ならびに『新修成篁堂文庫善本書目』からの図版の転載について、ご許可をいただきました。記して御礼を申し上げます。

〔注釈〕

- 1) 青山堂（雁金屋清吉）によって装幀された画帖であることがわかる。
- 2) 歌舞伎年表研究会編「宝永以前 歌舞伎役者年表」（『近松研究所紀要』7号, 1996. 11）、「役者移動索引」（『歌舞伎評判記集成』別巻, 1977. 12）など、土田衛を中心に集積してきた元禄役者の総合データベースを構築中である。
- 3) 土田衛「『歌舞伎年表』補訂考證 元禄篇其六」（『愛媛大学法文学部論集』文学科編第7号, 1974. 12, p. 15）
- 4) 東京芸術大学附属図書館所蔵。未翻刻。国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」（URI <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100276480/viewer/11>）参照。
- 5) ケンブリッジ大学図書館所蔵。「ARC 古典籍ポータル

データベース」（URI <https://www.dh-jac.net/db1/books/Cam-FJ.709.29/portal/8/>）参照。

- 6) 同一年度に二つの紋付が残る、元禄8年（1695）11月「三浦朝比奈岩石割」森田座、元禄9年（1696）7月「平親王将門」森田座の紋付は、摺の状態は異なるが、板木も含めて完全に一致している。
- 7) 以下、役者評判記からの引用する場合は、岩波書店刊『歌舞伎評判記集成』（第一期）の巻数と頁数を組み合わせた四桁で提示する。
- 8) 注1のp. 18。
- 9) 勝似の「似」は難読。別字の可能性あり。
- 10) 東京芸術大学附属図書館所蔵。国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」（URI <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100276523/viewer/4>）参照。
- 11) 国立国会図書館蔵 『寸志不遺』（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9369587/6>）。青山堂本の典型的橙色表紙で、題簽跡があり、南畝の揮毫と署名が入る。
- 12) 赤間亮「江戸歌舞伎の稀観番付」（『演劇研究』14号, 1991.1, p. 35）では、現存7点を報告している。
- 13) 元禄8年（1695）「和国ごすいでん」（早大演劇博物館）、元禄14年（1701）9月「三世道成寺後日」（国立国会図書館 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9369587/6>）。
- 14) 和田修編による『絵入狂言本にみる元禄歌舞伎展』解説パンフレット前期・後期（早稲田大学演劇博物館, 1992. 6-7）が会場で配布された。

※参照したURIの最終確認日は2021年1月31日である。

表 A

山村座	元禄10	元禄11	元禄12	元禄13	元禄14	元禄15	元禄16	宝永01	宝永02	宝永03
初太郎	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
小八	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
なにわ	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
中川半三郎	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×
長五右衛門	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×
四野宮平八	×	×	○	×	○	○	○	×	×	○
早川初瀬	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×
彦四郎	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
半太夫	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×
小主水	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
みよし	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
中村伝九郎	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
清九郎	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×
源八	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○
					確定					

表 E

森田座	元禄10	元禄11	元禄12	元禄13	元禄14	元禄15	元禄16	宝永01	宝永02	宝永03
中村清五郎	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
坂東沢右衛門	×	×	×	○	○	○	×	○	○	×
猿若山左衛門	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×
森田弥三五郎	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×
高村又四郎	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
大鳥九郎次	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
大谷広右衛門	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×
春川又八	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○
安田吉郎次	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
きぬ糸十郎兵衛	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×
西国兵助	×	×	○	×	○	○	○	×	○	×
歌仙四郎五郎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
松本半左衛門	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○
坂田銀四郎	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
安田吉郎次1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
中村弥平太	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×
松本吉左衛門	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×
						候補				

表F

森田座	元禄10	元禄11	元禄12	元禄13	元禄14	元禄15	元禄16	宝永01	宝永02	宝永03
歌村十次郎	×	×	×	×	○	○	○	×	○	×
花岡みやこ	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
市川団蔵	×	×	×	○	○	○	×	×	○	○
出来島大蔵	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
出来島喜世三郎	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
玉村内蔵助	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
市川万太夫	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○
高島虎之助	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
出来島大助	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
					候補					

表G

森田座	元禄10	元禄11	元禄12	元禄13	元禄14	元禄15	元禄16	宝永01	宝永02	宝永03
玉村久米之助	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
花岡沢之助	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×
歌村数馬	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
山本小太夫	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
出来島大助	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
花岡染之丞	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
中山小主水	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
花岡小倉	×	×	×	○	○	×	○	○	○	○
中村妻之丞	×	×	×	中村座	中村座	妻之助	×	×	×	×
出来島若之助	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
					候補	候補				

表I

山村座	元禄10	元禄11	元禄12	元禄13	元禄14	元禄15	元禄16	宝永01	宝永02	宝永03
早川初瀬	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×
玉村衛門	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
津川半太夫	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×
竹中喜世之助	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×
四野宮平八	×	×	○	×	○	○	○	×	×	○
中川半三郎	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×
勝山三芳	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
松島庭歌	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
玉川小主水	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
浜崎磯五郎	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
袖岡小太郎	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○
袖岡吉弥	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
早川万太夫	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
天津右近	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
						確定				

表 J

山村座	元禄10	元禄11	元禄12	元禄13	元禄14	元禄15	元禄16	宝永01	宝永02	宝永03
中村七三郎	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
中村伝九郎	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
小川善五郎	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
中村五郎四郎	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
早川伝五郎	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○
山川孫九郎	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
市川勝平次	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
					確定					

表 K

山村座	元禄10	元禄11	元禄12	元禄13	元禄14	元禄15	元禄16	宝永01	宝永02	宝永03
早川初瀬	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×
生島大吉	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
津川半太夫	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×
竹中喜世之助	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×
四野宮平八	×	×	○	×	○	○	○	×	×	○
中川半三郎	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×
松本糸之助	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
玉川小主水	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
松島庭歌	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
浜崎磯五郎	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
袖岡小太郎	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○
早川妻之助	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
生島初太郎	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
天津右近	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
野川宇源太	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
染山小和泉	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
四野宮小八	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×
浅田庄太夫	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×
音羽衛門	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
四野宮小源次	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○
滝井松五郎	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○
四野宮吉十郎	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×
藤本難波	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
松を村之助	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
玉垣作弥	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
					確定					